

2024年12月22日 クリスマス礼拝メッセージ

聖書: イザヤ書53章1~12節

説教: 悲しみと病を知る方

はじめに

ことは10月下旬頃からお店ではクリスマスソングを流しておりました。日本は不思議な国で、子どもが生まれると神社で七五三のお祝い、結婚式はキリスト教、お葬式は仏教、クリスマスになると居間にツリーを飾って祝いをする。外国の方が見たら宗教に関しては節操がないと思うでしょう。こんなふうには寛容なところが日本の優れたところだ、と言う人がいますが、それはちょっと違います。少し前の時代には、クリスチャンも天皇を神として拝めと言われたことがあるからです。なんでもオーケーと言いながら、いざとなれば偽りの神を拝めという時代がまた来るかわかりません。ですから私たちは、世の人たちが何も考えずにクリスマスをお祝いしているときだからこそ、本当の神はどこにおられるのかはっきりと示したいと思います。

イザヤ書53章は、旧約聖書のなかで救い主のお姿を鮮明に伝えている箇所として知られています。このところから、クリスマスの意味をもういちど考えてまいります。

1 神のひとり子

1) ひこばえ

2節。「彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。」

ここに「ひこばえ」ということばが出て来ます。これは前回も触れたのですが、切り株のわきから生え出た新しい芽、あるいは若枝のことで、イザヤ書の中ではしばしば救い主として来られる方のことを指すことばとして使われています。そのひこばえ、若枝である方は、見るべき姿も輝きも見栄えもないということです。クリスマスといえば飼葉桶に寝せられている赤ちゃんの絵がつきものです。光に輝いて、かわいらしく、まさにこの赤ちゃんこそ救い主というふうに描かれている。初めはそのような姿だったはずなのに、いったいいつから惨めな姿に変わってしまったのでしょうか。

2) 蔑まれた

そのことは3節にあります。「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知ってい

た。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」

学校や職場で、いじめや仲間はずれにあってる人たちのことを時々聞きます。たとえば、そっぽを向いて目を合わせない。そうやって自分たちのグループから追い出していく。これが聖書で使われている「蔑む」の意味です。ですから3節はこのように言い換えられる。「人々は、わざと顔を背けて救い主の顔を見ようとしないで無視して、蔑んだ。」

救い主が蔑まれたことで惨めな姿になっていった。そんなつながりです。ではどうして蔑まれなければならなかったのか。二つ理由があります。一つ目。例を挙げましょう。律法学者たちは、いのちに関わらない病気については安息日に治療行為をしてはならないと人々に教えていました。ところがイエスは、安息日の意味について正しく教えてから、安息日に片手の萎えた人を癒やしてしまう。これを境にしてイエスの人気は急速に高まっていく。律法学者たちにしてみれば面目は丸つぶれ、権威はがた落ち、イエスに人気をさらわれるという踏んだり蹴ったりですから怒り心頭です。それでイエスを殺そうと相談しはじめたということが福音書に出て来ます。こうして律法学者たちはイエスを蔑んでのけ者にし、とうとう十字架にまで追いやってしまった。

3) 病を負い痛みを担った

蔑まれた理由の二つ目。悲しみの人で、病を知っていたから。でもただ知っていただけなら蔑まれることはありません。4節に説明がある。「まことに、彼は私たちの病を負い私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだ。」

今言ったように、イエスの人気は急上昇。わかりやすく言えば大スターになっていく。輝きがあつてまことに見栄えが良い。そうすると、人々は思いはじめます。イエスは、近い将来ローマ帝国の支配からイスラエルを解放し、イスラエルの王になるに違いない。皆の目にはイエスはキラキラ輝いていた。ところが突然見栄えがなくなってしまう。なぜか。この方が私たちの病を背負われ、痛みを担ったから。どこでそんなことが起きたのか。十字架です。昨日までの大スターがやつれた姿

になった。それを見て人々は失望してしまう。そうやってみな顔を背け、蔑み、「あの男は何か悪いことをしたので神から罰を受けたのだ」と批判し、言いたい放題をしていました。こうして救い主は惨めな姿とられました。

2 苦しみを引き受ける神

1) 激しい苦しみ

でも、罪があるのは私たちでイエスには罪はありません。さばかれるのは私たちでなければならなかったはず。ところが、主は私たちの罪、咎を背負って苦しみました。それも激しい苦しみです。こんな理不尽な話はない。普通なら強く抗議するでしょう。「わたしは無罪だ。おまえたちのせいではどうして苦しまなければならないのか。」ところが、この方は屠り場に引かれて行く羊のように、口を開きません。ただ黙って苦しみを耐え忍ばれます。主が忍耐強かったからということなのでしょうか。

2) 満足する

では11節はどうでしょう。「彼は、自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。」目を疑うようなことばです。理不尽だけれど、それでもじっと歯を食いしばって苦しみを耐えたというのならまだわかるでしょう。誰でも一度はそんな経験があるからです。でも、激しい苦しみのあとを見て、満足したと言われてもわからない。そんな経験がないからです。

それでもいくつか分かることがある。神はいやいや消極的に苦しんだのではないということです。あるいは事故や偶然でこうなったのでもない。むしろ積極的に苦しみを引き受けようとしていた。そのことはわかる。

「救い主は神なので、私たち人間とは違う。苦しむことも難しいことではなかった」という意見もあるかもしれない。でもクリスマスはなんでしたか。神のひとり子がマリアを通して人となって来られたということでした。この方は確かに神です。しかし同時に私たちと同じ肉をまっとっておられる方でもあります。嬉しいときは大喜びし、悲しいときは涙を流し、お腹はすくし喉も渇く、真昼の太陽が照りつけば疲れを覚える。まったく私たちと同じです。ここに書いてあるとおり、主は激しい苦しみを味わった。でも、どうしてそこまでされるのでしょうか。

3 平安と癒やし

1) 罪の深刻さ

5節後半に答えがあります。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」主が十字架で苦しまれたことには目的があつて、私たちに平安を与え、癒しをもたらすためだった。救い主が苦しむことがどうして私たちの救いにつながるのか、わかりにくいかもしれませんが。みなさん、こんなことを考えたことはなかったでしょうか。「イエスは神なのだから、自分が苦しむという面倒なことをしないで、もっと簡単な方法で救えたのではないか。『あなたの罪を赦します』とひとこと言えば済むはずでしょう。」

当然の疑問です。しかし聖書はこの考えを真っ向から否定します。理由は二つある。一つ目。10節にあるように「彼を砕いて病を負わせることは主のみこころであった。」最初から主のみこころとして決まっていたので、私たちがこうしたらああしたらと言う筋ではない。こう言っては身も蓋もありません。二つ目の理由。こちらが本質的です。救い主が負われたのは、私たちの罪と咎です。その罪はどれほど悲惨で人を苦しめるものであるのか、そのことを私たちはどこまで考えていたのでしょうか。もし私たちの罪がそれほど大きなものではなくて、手軽に「あなたの罪を赦します」と宣言すれば済むのなら聖書はいらなかったでしょう。しかし神は私たちにこの分厚い聖書を与えてくださいました。その最初の所に何が書いてあるか。罪を犯したアダムとエバが生んだ二人の息子のうち兄であるカインが弟のアベルを殺したことが書いてある。これが罪の現実です。悲しいことですが、今も人が人を殺し合っています。私は殺していないと言い張ることはできません。心の中で誰かを憎んでいるのなら、もうすでにその人は殺人の罪を犯していると主は言われる。隣の人を愛しましょう、と言うのは簡単です。しかし現実はどうか。愛せない自分がいます。努力すれば愛せる人になれるのか。努力すれば人を憎まないようになれるのか。もしなれるのであれば、とうの昔にこの世界はもっと良いものになっているはずですが、なっていない。ということは、自分の力で自分を良い人間に変えることができなかったということでしょう。これが罪の力です。この罪でみな苦しんでいる。これを解決するには、神の子が苦しまなければならないほど罪が悲惨であるということです。

2) 末長く子孫を見る

さて、最後に考えます。救い主は私たちの咎を負って十字架で苦しみました。このようにしてくださった主を信じることにより、私たちの罪は赦され、神の前に正しい者とされます。これが救いです。しかし救いはそれだけではない。10節後半。

「彼が自分のいのちを 代償のささげ物とするなら、末長く子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。」

誰が、誰の子孫を末長く見ることができるのか、わかりやすく訳し直せばこうなります。「救い主は、救い主の子孫を末長く見ることができる。」救い主の子孫、すなわち主を信じた者たちのこと。聖書で「末長い」とは永遠のことです。主を信じた者たちは永遠のいのちをいただくのだというのです。世の人たちからは、そんなことはありませんと言われて笑われるでしょう。実際パウロも笑われました。でも主は、三日目に墓からよみがえら、このことばが真実であることを示してくださいました。

イザヤは、このメッセージを主が来られるおよそ740年前に語りました。そして語られたとおり、主はマリアを通して人となって来られました。汚い飼葉桶に救い主が寝かせてられている姿、私にはこの飼葉桶が十字架に見えてなりません。十字架はすでにクリスマスから始まっていたのです。このクリスマス、私たちの身代わりとなって激しい苦しみを味わわれた主の御名をあげたいと願います。